【滋賀】「公園やカフェ、ヤギ小屋にイベント」構想2年半の診療所リニューアル計画とは-徳田嘉仁・一般社団法人くわくわ企画代表に聞く◆Vol.1

2023年5月26日 (金)配信 m3.com地域版

公園で遊んだり、カフェでお茶をしたり。ヤギ小屋には子どもが集まり、ベンチには散歩の途中に休んでいる人も――。滋賀県にこんな地域の居場所をつくりたいと、診療所をリニューアルする計画が進んでいる。医師の徳田嘉仁氏が代表を務める一般社団法人「くわくわ企画」には多業種が参画し、2020年からプランを練ってきた。徳田氏は2024年に父が営む「徳田医院」（彦根市）の副院長に就任し、運営のかじ取りを担う予定だ。（2023年5月2日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら
▼第3回はこちら

徳田嘉仁氏（本人提供）

――徳田先生は2020年10月から、父・康孝氏が運営する徳田医院のリニューアルに向け、構想を練ってきたといいます。以前から承継を考えていたのでしょうか。

ぼんやりとですが、医師になったときからそうできればと考えていました。そもそも、医師を目指したのも父の存在が大きく影響しています。1999年に開院した徳田医院は実家の隣にあり、中学生くらいのころから父の診療を見る機会があったんですね。

父の診療は医療を「施している」というより、雑談を交わしつつ患者さんの生活背景や人生観も聞き取り、それらを尊重するものでした。患者さんが「町内会の旅行があるから」と言えば、「なら薬増やしとくわ」といったような。患者さんと上下関係なく地域に溶け込んでいる父の姿を見るにつれて、「おとんの診療っていいな」と。「医者をやるんだったらこういう医療がいいよね」というイメージがありました。

私は2013年から沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を受け、2016年から滋賀家庭医療学センターで後期研修を受けましたが、滋賀での勤務は徳田医院への加入を考えてのことでした。

現在の徳田医院の外観（本人提供）

――診療所リニューアルを進める一般社団法人「くわくわ企画」のサイトによると、敷地に公園やカフェ、ヤギ小屋を設け、イベントも定期的に開く構想があるとか。カフェやジムを運営するクリニックは取材したことがありますが、「ヤギ小屋」という発想に触れたのは初めてです。

息子の言葉にインスピレーションをもらいました。沖縄に住んでいたとき、当時3歳くらいだった息子に「どこに遊びに行く？」と聞いたら、「ヤギさんがいる公園がいい！」と言ったんです。「ヤギの存在が公園に行く理由になるんだな」と新鮮に思いました。

診療所リニューアルを検討するなかで調べたところ、ヤギは雑草を食べてくれることもあって飼育があまり難しくないそうです。実際に飼っている場も訪問しました。高齢者施設や保育所、飲食店などが入居する仙台市の複合施設「アンダンチ」でヤギがいる風景を見たら、これが良かった。ヤギ小屋が施設の入り口にあり、そこで子どもたちが餌をあげている場面が、「高齢者施設」というある種の壁のようなものを取り払っているような感じがしました。私たちが目指す空間演出のコンセプト（詳細はVol.2で紹介）にも合うと思いました。

リニューアル後の外観イメージ（提供動画から引用）

ヤギ小屋のイメージ（提供動画から引用）

――サイトでは「地域の居場所をつくりたい」とさまざまな構想が語られています。リニューアル時から行いたいもの、中長期的に実現させたいものは。

リニューアルに向け、診療所のそばに800坪（2645平方メートル）ほどの土地を買いました。そこに建物を造り、診療所の機能を移して2024年3月に竣工、私は同年4月のリニューアル開院に合わせて副院長に就任する予定です。診療所として活用するのは約800坪のうち3分の1以下で、広い余白のスペースを使っていろいろなことを行いたいと考えています。診療所自体も広く、診察室を3、4部屋設ける予定です。

イベントとしてのカフェや駄菓子屋、子ども食堂は開院時から行いたいですね。患者動線と分けて建物の一部にコミュニティスペースを設け、最初はここでイベントを開いたり、地元の小学生から高校生に自習スペースとして利用してもらったりできれば。屋外でもマルシェなどの催しを定期的に開く予定です。

中長期的な取り組みは資金繰りの状況によりますが、ヤギ小屋を備える公園や音楽スタジオの開設、カフェの常設化はリニューアルして5年ほどで、住まいや保育所の立ち上げは10年くらいで実現させたいです。

敷地内のイメージ（提供動画から引用）

カフェスペースのイメージ（提供動画から引用）

――リニューアル時に医療の面でも変化はあるのでしょうか。

在宅医療を拡充させる予定です。彦根市は人口が11万1500人ほどおり、在宅医療の対象となる高齢者も多いのですが、在支診（在宅療養支援診療所）は数軒しかありません。往診を行っている診療所はあるものの、在宅患者さんを100～200人ほど抱えて体系的に在宅医療を行っているところはあまりない状況です。私が専門とする家庭医療・総合診療を担う医師のコアは、自分が担当する地域のニーズを掘り起こしてアプローチすることだと考えています。その意味で、需要が大きいものの担い手が少ない在宅医療に貢献したい。

私は2021年から在宅医療を展開する医療法人双樹会に在籍し、現在は同会の「守上クリニック」（大阪市）に常勤医として働いていますが、同法人で在宅医療を学んできたのはこうした展望を踏まえてのことです。

人的体制の面では、在宅専門のスタッフを「メディカルコーディネーター」として配置したいと考えています。メディカルコーディネーターが病院や訪問看護ステーション、ケアマネジャーとの連絡や訪問スケジュールの調整、道具の準備などを行い、医師は医師にしかできないことに集中できる環境をつくれば、在宅医療の流れが効率化し、くわくわ企画の活動に充てる時間も取りやすくなると思います。

――自身の特性を生かし、地域医療の課題も踏まえて活動していきたいのですね。

その点では、将来的な病診連携を見据え、2023年6月から彦根市立病院でも週に1日働く予定です。これを徳田医院への加入後も続けたいと考えています。同院は彦根市の中核病院ですが、人材不足が続いていると聞きます。病院の負担軽減のため、急性期病院が対応する必要性が低かったり、同院を退院したりした患者さんを徳田医院でフォローしたいんですね。私が病院で働いて院内のスタッフと関係を築けば、徳田医院の患者さんを病院に紹介する際もスムーズに進みやすいでしょう。私は救急医療も好きなので、その技術を維持するうえでも有効だと思います。

診療所で外来診療と在宅医療を行いつつ、中核病院でも定期的に働く。フィールドの異なる場に携わることで地域の課題を包括的に把握し、くわくわ企画の社会活動にも生かす。こうした良い循環ができるとうれしいです。

◆徳田 嘉仁（とくだ・よしひと）氏

2013年大阪医科大学（現大阪医科薬科大学）卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を、滋賀家庭医療学センターで後期研修を修了。近江八幡市立総合医療センター、医療法人双樹会守上クリニックなどを経て、2024年4月に徳田医院の副院長に就任予定。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医・指導医、日本専門医機構総合診療専門医・指導医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】